

令和7年度 園評価書

園番号

44

園名 静岡市立高部こども園

I 経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
心豊かでたくましいたかべっこ	夢中になって遊ぶ	子ども達は「自分が好き」「友達が好き」という気持ちを持ち、自分も人も大切にしている	どの学年も自分を表現し、友達との関わりも年齢に応じた様子が見られつつある。十分に自分を出して表現している子もいる一方、自信のなさから抑えてしまう子もいる。保育者のかかわりを考えていきたい。	B	B	雑然とした環境に見えるが、草花や自然物にあふれ、使いたいときに自分で取りに行ける遊びのきっかけになるものがたくさんある。また遊ぶ姿や友達や保育者との関りを見ていると子どもたちは様々な方法で自分の気持ちを出している。あまり園に来ることがないため保育者の関わりが見えないが、この会を通して子ども一人一人に応じた丁寧なかかわりをしていると感じた。	子ども達が更に自信をもち自分を出せるようになるために、保育者は様々な姿や表現も受け止め援助やかかわりをしていく必要がある。自己肯定感が高まるように、一人一人の姿すべてを丸ごと受け止めていきたい。 毎週末の職員による振り返りの時間でクラスで経験することを伝え合い、どのようにしたらよいか、発達に合っているのかなど保育計画を実現させるための話し合いをさらに深めていきたい。 また、子どもへの教材や教具の出合わせ方や引き際にも着目し、遊びがマンネリ化したり、新しいものに飛びつき終わってしまわないようにしたい。
		子ども達は「おもしろい」「何でだろう」と様々なことに興味をもって遊んでいる	様々なことに興味があり「こうしてみたい」「何でだろう」という思いを持ち遊ぶ姿がある。それは、各学年の拠点の中に興味をくすぐる教材や環境が用意され、遊びのヒントがあるためであると考えられる。また、それが発揮できるのは、安心できる担任との関係があるためだと感じる。	A	A		
		子ども達は「やってみよう」「明日もやりたい」と意欲をもち、心も体も元気に過ごしている	子どものつぶやきや保護者からの話から次の日の登園や遊びを楽しみにしている姿がある。園が遊びの場であり楽しい場であることが伺える。家庭から遊びに使いたい物を持ってきたり、登園後友達と誘い合ったりして自分達で遊び始める姿が見られる	A	A		

t

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）	
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	職員は各年齢の発達を捉え、子どもの表れを受け止め、よさに目を向けた支援をしている	外部講師を迎える研修会で各年齢の定型発達児の育ちからの自園の課題について学ぶことができ、その後のクラス保育で意識していくことができた。またその子よさに着目して得意な事を伸ばす取り組みをしたクラスもあった。学年の垣根を越えて遊びの仲間になることができ自身のクラスではない子に対しても、面白さを共有でき、それもその子よさに目を向けることに繋がった。	A	A	外部講師を招いて保育を見てもらいアドバイスを頼んでも園側が望むような内容の話でないこともある。昨年度から引き続き同じ講師に依頼していたが、今後の保育の方向性が明確になったり、職員のやる気に繋がったりしていることはとてもよいことである。来年度も引き続き同じ講師を招き、研修を行っていったらどうか。 保育者は、子ども一人一人のことを公平に見ていると感じる。かなり以前にはなるが、「担任が話をしている保護者が一緒に自分は声をかけられないから嫌われているのではないかと感じる」と聞いたことがあった。だが今は、コドモンでドキュメンテーションが配信されているので、子どもの様子がよくわかり、送迎以外の方にも見ってもらえると保護者間でも評判がよい。このまま続けていってほしい。	来年度も外部講師を招き各年齢の発達を見据えた援助についてアドバイスをいただき、保育を進めていきたい。また、職員全員がその子よさに気付き、子ども理解を深められるように、遊びの様子や面白かった場面、変化について気軽に話せる雰囲気を作り共有を行い、全園児の保育に当たってほしい。	
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	職員は一人一人の子どもの発達や経験の差を理解し、どの子も安心して生活できるように支援している	職員との関係の中で安心して生活や遊びに取り組んだ年少、個々の発達の現状を「伸ばし、と捉え前向きに支援してきた年中、友達のよさに刺激を受けながら、「やってみよう」と努力する力がついてきた年長。どの学年も一人一人に注目して保育をすすめられた。	A	A			2号認定児保育の遊び（午後の遊びや長期休暇の遊び）の様子を1号認定児にも紹介したり、異年齢児との関わりが教育時間にも継続できるようにするなど、どの子も豊かな経験ができるように配慮していく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	職員は子ども達が考えたり試したりしながら夢中になって遊ぶための、環境構成や支援をしている	職員自身が教材研究を重ね他の学年が準備している教材にも興味を示していた。クラスの遊びを考える上でやるべきか迷った時は「まずはやってみよう」という気持ちで取り組み、子どもの実態と合わなかったらもう一度考える試行錯誤で毎日環境を整えることができた学年もあった。	A	A			人的環境・物的環境に加え自然環境・社会環境にも目を向けそれぞれの相互作用を通して子ども自ら興味関心が広げられるようにしたい。クラス間で共有したり、他の職員のアドバイスをもらったりしながら、一緒に環境について考えて場の構成をしていく。
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	園は園児が安全に遊ぶための園庭整備や、自分の命を守るための減災教育に取り組んでいる	園内の環境の中で危険と感じたことは、すぐに対応することができている。また、環境整備に従事する職員がいるため、素早く処置することができる。減災教室では保護者も招き、当たり前と感じていた避難方法を見直すきっかけとなった。	A	A	片付けや整理整頓、遊び方など子どもと一緒に安全な園庭づくりや遊びを考えていく。また、今までの当たり前を見直し、防災計画、避難訓練計画の作成をする。		
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	園は保護者と連携しながら、手洗いがいい、排泄等の基本的な生活習慣の定着や、感染症拡大予防の対策をしている	排泄の自立に関し年齢発達に応じた関わりを保護者に伝えながら協力して行えるように取り組んだが難しさもあった。他の生活習慣もそうであるが、個々の思いに寄り添いながら無理なく進めようとした。また、感染症対策でも必要な事を行い感染防止に努めようと努力した。	A	A	園生活において必要な基本的な生活習慣をユニバーサルデザインを意識して必要な場所に掲示し、誰もがわかりやすくでき、また生活習慣の自立に向かえるようにする		
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	園は一人一人の特性やその子よさを捉えた支援方法を職員間で共有し、支援を行っている	発達面の支援が必要な子だけでなく、外国籍の子に対しても支援を行なえるようにしている。生活や遊びの支援に加え、日本語の支援も行っている。翻訳機や支援カードを使い、誰一人取り残さないような細やかな支援を考えている。担任同士は共有ができていくクラスが多い。級外や他学年の職員との共有を努力していきたい。	B	B	発達面の支援が必要な子だけでなく、外国籍の子への配慮も考えられている。ユニバーサルデザインと個別カードを利用して、その子を含めたクラス全員の保育が考えられているのではないかと感じる。		
5 組織運営	(1)組織体制の充実	園は分掌リーダーを中心に行事運営に関する情報共有に努め、企画運営に取り組む、子ども達の経験が豊かになるよう取り組んでいる	各行事に対して、子どもが見通しを持ちながら当日をたのしみにするようなワクワクする企画ができつつある。分掌担当がすべて企画をするのではなく、様々なアイデアを職員で出し合うことを経験してきている。半面、分掌リーダーが前月の会議の中で企画案を出しているが、職員が具体的にイメージして綿密な計画に至らないことがある。また、会議時に配布されてすぐには質問や疑問が出せないことがある。	B	A	一人一人に応じた支援を常に模索していく難しさがあると感じる。また、支援方法の職員間の共有はとても大切な事であるが、共有内容、方法を工夫していかなければなかなか難しいと思う。特性理解に基づいた支援によって子どもの表れは大きく変わってくると思うため、よりよい支援のあり方、共有についてこれからも努めていってほしい。		
6 研 修	(1)研修体制の充実	園は公開保育を6回実施し、研修テーマや手立てについての協議を行い、翌日からの保育に活かす視点を明確にしている	研修の手立ての「夢中になって遊ぶ姿の探り方」について迷いがあったが、研修主任、研修部、園長、副園長と悩みながら研修を重ねてきた。PDCAサイクルを意識した毎週の振り返りや、個々のよさを探る映像研修など、高部独自の研修を重ねたことで、次週の保育に向けて整理ができ、保育の積み上げができた。	A	A	高部独自の研修を引き続き行う中で、得た知識が保育実践と繋がり合うような話し合いをしていきたい。また、素直に謙虚に受け入れていき、保育力に繋げていく。		
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	園は子ども達が全身を使って遊ぶための環境や、考えたり試したりして遊び込んだりするための環境を準備している	長い縄を運び水路を作る遊び、こま回し、ロープ遊び、滑り台の逆さ登りなど、体を使った遊びが年間通してきていた。それを何度も挑戦する中で子どもたちははきた喜びを感じたり、体の使い方を考え、自然に体幹を鍛えるような遊びができていると思う。	A	A	更に実体験を通し試行錯誤ができるようになるために、微細運動、粗大運動ができる環境を整えていきたい。職員はできるまでの過程を大切に、様々な育ちを見取り遊びを価値づけていく力を養い自身の保育の価値を意識していきたい。		
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	園は園だより、クラスだより、毎日のドキュメンテーションを通じて、園の取り組みを発信すると同時に、登降園時に一人一人の様子を伝えている	コドモンで日々の保育をドキュメンテーション形式で配信している。配信内容が、保護者に日記ではなく育ちが伝わっているのかと心配になることもあるが、保護者から反応が返ってくるのが励みになっている。また、写真が入れられることで、遊びの様子が伝わりやすいと感じる。	A	A	今年度、小学校長を評議員に招き、教務主任、1年生担任の来園へとなぐことができたことは、小学校との連携において自園の強みになっていると感じる。		
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	園は近隣園との交流や清水第六中学校区の「小中一貫協議会」で、園児同士の交流や職員同士の情報交換が行われ、園生活に活かされている	近隣園との交流が年4回実施計画され、交流会では自然と交わり遊ぶ姿があったり、気持ちがあがって向かうきっかけになったりしている。六中校区協議会では、実際、近隣校（高部小・高部東）の1年担任と年に3回顔を合わせたことで具体的な子どもの姿を伝えあうことができ、また地域の子どもの特性や課題について話すことができた。	A	A	今年度新たに、JA女性部との連携も取り始めたところ。更に地域に根付いた関りを広げていってほしい。		
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	園は地域の様々な人との関わりを大切に、園児が経験したことを地域へ発信していく	地域の行事に今年も数多く参加し、園の保育活動についてアピールできている。また、今年はJA婦人部の方がバケツ稲をくださり園の田んぼカリキュラムの中で育てることもできた。畑での収穫も地域の方の指導の下、豊かな体験ができていると感じる。	A	A	最後に、高部こども園は本当によくやっていると感じる。そのよさを地域にもっと発信していくことが重要になると感じる。来年度も期待したい。		